

異なる禅僧像と清規

小川 太龍

「タノミマシヨ（頼みましよう）」

三月下旬から四月上旬にかけて、全国の臨済宗の専門道場では、「雲水」とも呼ばれる、入門を請う禅僧たちの声が響きます。藍染め木綿衣に綱代笠を被る禅僧の行脚姿は、清々しいと感じる方もおられるでしょう。

かの夏目漱石も、禅僧を快く思ったようです。漱石は、神戸祥福寺の二人の雲水と交流があり、彼らに宛てた手紙に、「あなた方は私の宅へくる若い連中よりも遙かに尊い人達です」と、記しました（『定本・漱石全集』巻二四）。また、彼らが漱石宅

を訪れた様子について、漱石の妻も好意的に次のように回想しています。「……とにかく一向きづまりな、いらいらしたところがございませぬ。それが大層夏目の気に入った様子で、……」（『漱石の思ひ出』）。

漱石は、若い頃に坐禅経験もあり、禅にも修行に専心する禅僧にも魅力を感じたのです。

ところで、禅には長い歴史があり、中国の唐代（七世紀）に発展し、日本には鎌倉期（十二世紀）にもたらされ、現代に至っています。では、漱石や私たちが思い描く現代の禅僧像と、中国の昔の禅僧たち

の姿や生活は、同じなのでしょうか？

もちろん共通点もありますが、やはり少し異なるようです。例えば、宗祖、臨済りんざい義玄げんが活躍していた九世紀の唐代の禅僧について、日本から唐へ留学した平安期の天台宗僧、円仁えんにんは、日記（『入唐求法巡礼行記』）に次のように記しています。

〔西禅院に宿泊した際、〕二十人ほどの禅僧たちがおり、彼らの心持ちは、誠に騒々しく乱れていた（二十余の禅僧有り、心は鬪乱にゅうらんを極む）。

（卷二「開成五（八四〇）年四月二十一日」）

〔華嚴寺の善住閣院には、〕五十人ほどの禅僧がいた。彼らは皆、毛織衣しやくじょうに錫杖なすきを携え、方々から集まり行脚す

る者である（禅僧五十人有り。尽く是れ毳衲せいのう・錫杖にして、各おの諸方より来たり巡看する者なり）。

（卷三「同、五月十七日」）

円仁が記す「毛織の衣を着てガヤガヤと数十人で行脚する禅僧たち」は、私たちが持つ禅僧のイメージと異なるのではないでしょう。

当時の日本では、宗派としての禅は認知されておらず、円仁には、禅僧たちが奇異に映ったのかも知れません。また、彼が目にした禅僧たちが例外的だった可能性もあります。しかし、いずれにせよ、現代の私たちが持つ禅僧像と、当時のそれが異なることに、不思議はありません。

それは、時代差に加え、文化の違いもあるためです。例えば、日本の禅僧の足下と

いえば、草鞋・下駄・草履ですが、中国では今も昔も禅僧たちは、靴（履）を履きません——本山の法堂での儀式に見ることができま——。この点を取っても違うのです。

では、昔の中国の禅僧たちは、どのような修行生活を送っていたのでしょうか？

残念ながら、臨済たち唐代の禅僧たちの生活は、先のような断片資料があるだけで、よく分かりません。しかし、宋代以降になると、禅寺の役職・儀式・行事などの、生活規範を記した書物である、「清規」が編まれるようになり（十二世紀）、そこから当時の生活がある程度うかがうことができます。

そこで、本連載では、現存最古の清規である『**禅苑清規**』（宋代、十二世紀）や、さまざまな清規の集成である『**勅修百丈清規**』（元代、十四世紀）を中心に、各種資料を

用いて、現代日本の専門道場との違いも意識しながら、昔の中国の禅僧たちの生活を考えてみたいと思います。

ただし、もともと清規は、各寺の状況に合わせて作られたものであり、広大な中国全土で共有されていたわけではありません。また、資料の時代も異なるので、あくまでも架空の寺院での生活になります。

さて、想定するのは、宋代の伝統を残しながら、『**勅修百丈清規**』を中心に用いて運営する七百年ほど前の中国の大きな禅寺です。次回から、当時にタイムスリップして、禅僧たちの修行生活を垣間見てみましょう。

小川 太龍（おがわ たいりゅう）

一九七八年兵庫県生まれ。花園大学大学院博士課程単位取得、博士（文学）。専門は中国禅思想史・禅宗史。明石市常楽寺副住職・花園大学文学部准教授・同、国際禅学研究所兼任研究員。

お願い

花園俳壇・花園歌壇

俳壇・歌壇への投稿は、それぞれ別の郵便はがきを使用し、各三句(首)までを読みやすく書いてお送りください。

*ㄨ切りは毎月1日です。

『花園』へのご意見・ご感想など

本誌へのご意見・ご感想など、「編集室花園係」までお送りください。お待ちしております。

送先

〒616-8034 京都市右京区花園木辻北町1
妙心寺派宗務本所内編集室
俳壇／歌壇／花園 係

*住所、氏名を必ずお書きください。

*俳壇・歌壇ともに作品は未発表のものに限ります。(他誌投稿作品、転載は不可)

*なお投稿はお返しいたしません。

花園
hanazono

「いつもココロに花園を」
あなたとわたしのポケットエッセイ集

【花園】第74巻 第4号(通巻第872号)
令和6年4月1日発行(毎月1日発行)
定価60円

【発行人】野口善敬

【編集人】箱崎善法

【印刷人】古崎良一

【発行所】京都市右京区花園木辻北町1
妙心寺派宗務本所 教化センター
振替／01060-9-1400
電話／075-463-3121

表紙の絵

「夜桜」



桜の季節は夜目が利く。
花びらと踊ろう。

絵・元場 葵(もとば あおい)

月刊『花園』1冊送りの年間購読料は、1,620円(税・送料込)です。
下記の電話か、ホームページでお申込みください。

【妙心寺派宗務本所 頒布課】電話：075-467-2990

【妙心寺派直売店 web shop】

<http://www.myoshinji-shop.jp/fs/myoshinji/g05-0002>

*乱丁、落丁本はおとりかえいたします。